

博報財団 第12回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	黄 永熙 (ファン ヨンヒ)
在住国名	韓国
所属・役職	漢陽サイバー大学校・副教授
招聘回(招聘研究期間)	第12回 (2017年9月1日～2018年2月28日)
受入機関	お茶の水女子大学
招聘研究テーマ	第二言語としての日本語の再構成メカニズムに関する縦断的研究 — 韓国人帰国児童を対象として —
研究目的	韓国人帰国児童の姉妹二人が日本で7年間の日常生活や学校教育を通して日本語を習得した後、帰国してから10年以上保持しつつも衰退している日本語の存在動詞に現れる言語的特徴を記述しながら、第二言語の維持・摩滅のメカニズムを究明する。
<p>研究成果概要:</p> <p>長期間にわたって韓国人姉妹が第二言語として接触した日本語による自然談話や作文、調査文調査のデータを「習得→維持→摩滅→再接触」という四つの時期にわけて分析した結果、韓国人帰国生のライフサイクルにおける日本語の存在表現の変容について以下のようなことが分かった。</p> <p>(a) 帰国後6ヶ月までの保持期には、日本語をベースとし、6ヶ月後の喪失期には韓国語がベースとなり、1年後の喪失期には日本語の使用がなくなる。</p> <p>(b) 存在表現の体制は、イルとアルが二軸をなしながら、有情物主語の能動的で適切なイルの使用が日本語との接触度の高い話者 A(姉)を中心によく見られる。また、話者の属性からみて日本語との接触度の低い話者 B(妹)は非標準的なアルを導入しはじめており、イルからアルへ移行するプロセスが導き出される。</p> <p>(c) 習得期に西日本地域の方言形にも接触しているが、オルの使用は補助動詞や日本語母語話者の繰り返しのみに現れており、維持されにくい要素と考えられる。また、帰国生の日本語は、成人層の日本語接触者にみられる分析型の「存在動詞+デス」はほとんど現れず、統合型のマス形として残りやすいといえる。</p> <p>(d) 自発的な日本語の使用がなくなった摩滅期における調査文調査では、「イル・アル・ゴザルを有情物述語のプロトタイプとする話者 A」と「アルを有情物述語のプロトタイプとしつつある話者 B」に分けられる。</p> <p>(d) 存在表現の「習得・保持・摩滅」とかかわる言語外的要因としては(非常に暫定的結論ではあるが)、「年齢」「化石化」が考えられる。</p>	
<p>展望:</p> <p>今回は限られた研究期間の制約で、文法カテゴリーのうち、存在表現のみに焦点を当てることができた。今後、対象を成人層の日本語接触者まで拡大することと、「可能表現・アスペクト表現、否定表現、条件表現、文末表現、終助詞」などを記述・分析し、第二言語としての日本語の維持・摩滅の実態を総合的に考察することが課題として残る。</p> <p>本研究はこれから次世代を担う、日本を経験している韓国の子供たちの豊かな日本(語)理解という実践的な意義という未来志向的な展望があり、ことばと文化の接触における新しい資源を提供できるだろう。一個人、特に言語形成期において第二言語接触者の日本語ライフサイクル(習得→維持→摩滅→再接触の周期)にみられる、第二言語の再構成過程における日本語の変化を明らかにし、言語維持と言語環境との相関性、究極的には言語維持とかかわる新しい理論の構築や新しい仮説の設定に極めて意義のある考察だといえよう。</p> <p>最後に本研究は上記のように第二言語習得研究の一分野における学問的成果はもちろん、言語の経済性を考慮すると、社会文化的に第二言語接触者の生涯における第二言語維持や摩滅の問題と関わって多くの談論が広がるだろう。</p>	